

ノンシードの日下(東北)が大接戦の男子で優勝、大本命の関谷がダントツで女子優勝を決めた。紅葉真っ盛りの日光で学生が燃えた。

2007年11月11日 栃木県日光市
2007年度日本学生オリエンテーリング選手権ロングディスタンス競技大会

男子選手権 - 11.1km 400m

- | | | | |
|---|------|---------|--------|
| 1 | 日下雅広 | 1:25:06 | 東北 3 |
| 2 | 西村徳真 | 1:25:30 | 京都 4 |
| 3 | 茂木轟彦 | 1:26:51 | 東京 4 |
| 4 | 長縄知晃 | 1:27:04 | 東北 4 |
| 5 | 小山温史 | 1:27:18 | 東京工業 4 |
| 6 | 林泰斗 | 1:28:15 | 東北 4 |

女子選手権 ? 7.8km 210m

- | | | | |
|---|-------|---------|--------|
| 1 | 関谷麻里絵 | 1:02:46 | 京都 3 |
| 2 | 千葉妙 | 1:12:06 | 筑波 4 |
| 3 | 稲葉茜 | 1:14:14 | 筑波 4 |
| 4 | 井手恵理子 | 1:14:33 | 日本女子 4 |
| 5 | 笠原綾 | 1:14:47 | 日本女子 4 |
| 6 | 松永真澄 | 1:17:13 | 日本女子 3 |



念願の優勝杯を手にする関谷麻里絵(京都大学3年)(左)と日下(ひした)雅広(東北大学3年)(右)

日下・ノンシードから優勝

インカレ前に有力選手を選考し、別枠でスタート時刻を決定するシード枠。ここに名前を連ねることは、インカレ選手権クラスを走る選手たちの最初の目標である。シード選手は学連公認の注目選手ということになる。歴代のインカレ、とりわけロング種目の優勝者は、ほぼこのシード選手の中から輩出してきた。

ところが、今回男子で優勝した日下(ひした)(東北大学)は、この枠に入っていない。このようにノンシード選手がインカレロング種目で優勝するのはきわめて稀である。

シード選考は過去の実績を基に行われる。日下の過去実績が乏しいということを示しているが、それだけここ1年の成長は目覚しかったということだ。

インカレロング直前に行われた全日本リレーでダントツの成績をたたき出していた日下の實力は、実行委員会でも注目されていた。全日本リレー大会で日下が記録した巡航速度が、男子選手権クラスの距離を決める指標となっていた。

雨の中、大接戦の男子

今回のテレインはアップダウンが少なく、通行可能度もバツグン。季節は秋、天気によければ最高のレースコンディションとなるはずだった。だが大会当日は雨。日光の土は滑りやすく、ベストコンディションとはならなかった。

そんな中、男子は想定ウイニングタイムに迫るタイムでまとめてくる選手が次々と現われる。さすがにみなこのインカレに照準を合わせてコンディションを作ってきている。

前回優勝の茂木(東京大学)が中間までは日下を上回る走りをしながら、最後のループ区間で回る順を間違え3位に後退した。とにかくこれだけ混戦だとワンミスが勝負を決める。

優勝した日下は、レース中のコントロール間でのベストラップが一つもないが、そのかわりにミスを最小限に抑えてこの大接戦をモノにしている。

日下選手のコメント

ロングエリート。それはオリエンテーリング部に入部して間もない頃から

の憧れでした。さらにそこで入賞、優勝ともなれば、夢のまた夢。昨年の大会では初めてエリートとして出走しましたが、勢いよく飛び出し過ぎて現在地を見失い、13分の大ミス。

それから1年、大会参加を重ねるうちに自分の持ち味というのが分かってきました。それは、「最後まで粘れること」。

それまでは「ここでとばしてタイムを縮めよう」といってナビゲーションがおろそかになり、大きなミスをしてしまうことがあったのですが、「とばさなくてもいいから、最後まで粘れば勝てる」と思いこませるようになってからは、大きなミスが減り、また多少のミスをして慌てることもなくなり、安定感が出るようになりました。それは自信になりました。

東北大学の部としての雰囲気もよかったです。昨年を超える競争の激しさ、下級生のやる気の高さなど、切磋琢磨するのに非常によい環境でした。東北大会の地図調査や試走で積み上げた

体力に、10月のトレーニングがうまくはまり、風邪をひいた以外最高の状態で臨むことができました。

ロング当日は雨が降ったり止んだりの天気で、眼鏡をかけている自分にとって不利な気がしましたが、それは逆に負けたくないという気持ちを生みました。レース中はルートに迷いが生じたり、ナビゲーションが未熟だったりして無駄な動きがありました。それでも自分だと思って我慢して1つ1つコントロールを回っていました。

そしてラスポへ向かう長い道走り、東北大の声援が聞こえてきました。苦しくて、でも嬉しくて、フィニッシュ前なのに泣きそうだったのを覚えてい

ます。そして決まった優勝。表彰式では、雨の手荒い祝福を受けました。(日下雅広 東北大学3年)

大本命・関谷がダントツ優勝

混戦だった男子と対照的だったのは女子選手権で優勝した関谷(京都大学)だ。いきなり1番でトップラップを奪うと、その後一度も1位を譲ることなく独走する。とにかく速い。

雨でぬかるんだコンディションにも関わらず、設定ウイングタイムを2分も切ってフィニッシュに飛び込んだ。2位以下を9分以上離すぶっちぎりぶりだった。

京都大学の女子部員は多くないが、

過去には番場洋子、宮内佐季子などインカレを制し、日本を代表する競技者となった先輩が居る。関谷もまた先輩に続こうとしているように見える。

2位・3位は筑波大学、4位・5位・6位は日本女子大学。この3校だけで入賞者を占めてしまった。

関谷選手のコメント

目標であり、自分との約束であった優勝という結果を目の当たりにしたとき、素直な嬉しさと感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

この優勝は私一人の力で取れたものではない、共に高めあう仲間、応援してくれる皆、目標にし、競い合ってきたライバルがいたからこそ。その全ての人たち、そしてインカレという素晴らしい舞台を準備して下さった運営者の皆様にまずお礼を言いたと思います。本当にありがとうございました。

本番のレースで意識したことは、本場に基本的なことだけでした。視野を広く、基本動作を確実に。人に会ったら必ず地図を読むこと。前日にペナただけに十分すぎるほど番号確認をしていたというのは内緒の話ですが。

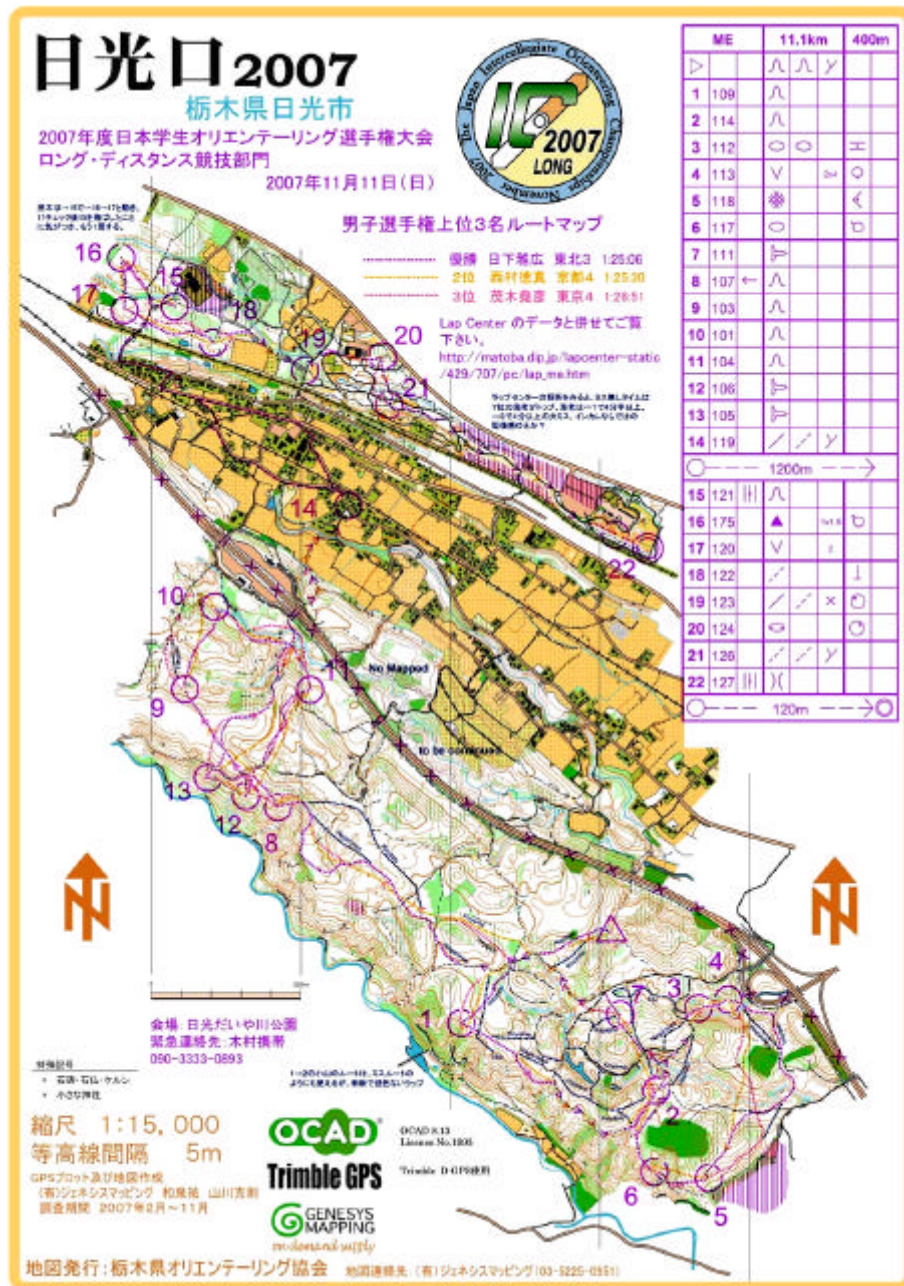
とにかく、今回のインカレは何も気負うことなく、自分をいっぱい出して楽しんで走りきることが出来ました。

準備も十分にすることが出来、あとは精一杯走るだけ、という肉体的にも精神的にも非常に良い状態で本番を迎えることが出来たと思っています。

(昨年度インカレの)ミドルで優勝したからというプレッシャーなどありませんでした。私にとってこのインカレは去年の悔しさからの続きにあるものだったから。ゴールして、去年追いつけなかった人の姿を見たときには、ああこれが1年間の私のインカレへの思いだったんだ、この日のために頑張ってきたのだと悟り、本当に涙がこみ上げるようでした。当日のレース、会場の様子、ライバルたちの表情、いろいろな風景が胸に焼き付いています。それだけこのインカレは私にとって濃く、とても楽しいものでした。(関谷麻里絵 京都大学3年)

インカレロングを終えた優勝者たち。そして残念ながら敗れた挑戦者たち。その心は早くも3月に開催される奈良インカレ(ミドル&リレー)に向いているようだ。

(木村佳司)



今まで何度もインカレや合宿で使われてきた伝統の日光トレイン。今回初めてGPSが投入され、高精度に作り直された。